

巻頭言

東日本大震災から半年あまりが経過したが、福島原発事故も未だ終息しておらず、不安な日々を送られる被災者は少なくない。また円高や欧米の金融不安のなか、日本経済はなかなかデフレから脱却できず、日本全体が暗闇のなかをさまよっているような感がある。なんとか一日も早く日本が元気を取り戻し、国際的にもさまざまな分野で再び輝きを放つようになることを願う今日この頃である。

さて、第1回日本中医学会学術総会が9月3日・4日に東京・船堀で開催された。昨年8月に日本中医学会設立記念シンポジウムが開催されたが、日本中医学会の学術総会としては今回が第1回となる記念すべき総会である。中国・台湾・韓国など海外からも多数の研究者が参加され、学術的にもレベルの高い発表が数多くあった。

そこで本号では、第1回学術総会の代表的な発表をいくつか掲載することにした。まず、平馬直樹会長による会頭講演「中医学の継承」を巻頭論文として掲載した。『素問』『傷寒論』など中医学の古典をたどり、平馬先生が北京留学中に老中医たちから学んだ中医学について解説しながら、中医学をどのように継承すべきかを考察した、本学会の大きな目的を示す論文である。続いて、シンポジウム「中医学の科学的エビデンスを得るために」から3編の論文を掲載した。昨年の設立記念シンポジウムでも先端科学研究が紹介されたが、日本中医学会は「伝統医学と先端科学の融合」を目的の1つにしており、今回は光計測による非侵襲的生体計測法に関する研究が紹介された。近い将来、これらの研究を中医学研究に応用することにより科学的エビデンスが蓄積され、中医学の一般臨床への普及がよりいっそう進展することが期待される。これらの論文以外にも第1回日本中医学会学術総会のすぐれた講演については順次掲載していく予定である。

平成23年10月
日本中医学会雑誌 編集長
酒谷 薫